

迷宮歴史俱樂部

戦時下日本の事物画報

[新装版]

モリナガ・ヨウ[著]

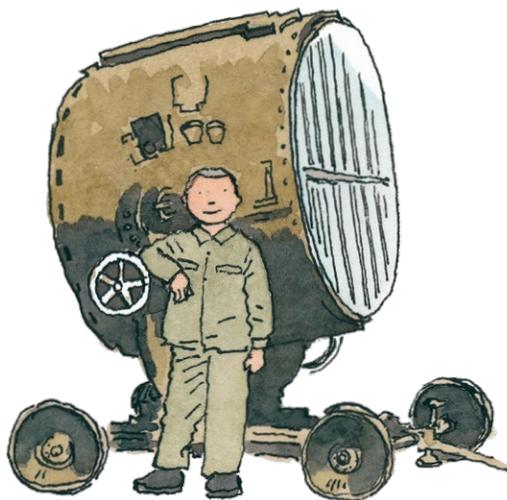


大日本絵画

迷宮歴史俱樂部

戦時下日本の事物画報
[新装版]

モリナガ・ヨウ[著]



大日本絵画

は じ め に

歴史の本を読んでいてふと気になったものを、あらためて調べてみると、実はその後には作られたイメージに過ぎなかったり、もっと深い更なる発見があったりします。見慣れた記録写真でも、視点を変えてみると意外な世界が立ち上がってきます。

この凶鑑というか歴史系イラストルポは、ミリタリー・戦史マガジン『歴史群像』に連載されたものです。取り立ててどこに向かうという目的のない旅ではありませんが、連載が進むうちに、細かな戦時下生活カタログのようなものになってしまいました。

イラスト記事なので凶像のヒントがないと興味はあってもまったくどういう物かわからず記事化を見送ることも多かったです。文献資料だけでなく関連する場所に行ったりもしました。

ひとつひとつ小さな事物を通して、実際の所どうだったのか？ という手触りであるとか、その時代の空気に近づこうとしています。

想像上過去の時間に身を置いて周囲を見回す縁よすがになれば幸いです。同時に、これらは遠い時代の関係ない出来事ではなく、現在と地続きの世界でもあるようです。

作画資料にした昔の写真はほとんど白黒です。当時の絵葉書やカラー図、博物館の展示品や絵日記などを参考にできるだけ実物に接近するようにいたしました。不明な物についての彩色は筆者の想像によります。ご了承ください。

モリナガ・ヨウ



迷宮歴史倶楽部

えと文生リナガヨウ

目次

はじめに……………	03
第一章	
本土決戦の理想と現実……………	05
風船爆弾1……………	06
風船爆弾2……………	08
一宮砲台1……………	10
一宮砲台2……………	12
掩体1……………	14
掩体2……………	16
照空船……………	18
迷宮歴史こぼれ話【1】……………	20
第一章…参考文献……………	21
第二章	
戦時下日本の空気感【其の一】……………	23
防空1・「空襲警報発令」……………	24
防空2・防空頭巾発達史①……………	26
防空3・防空頭巾発達史②……………	28
防空4・窓ガラスには紙を貼れ……………	30
金属類回収1……………	32
金属類回収2……………	34
迷宮歴史こぼれ話【2】……………	36
第二章…参考文献……………	37
描き下ろしコラム1……………	38
第三章	
戦時下日本の空気感【其の二】……………	39
マネキンは何をしてたか……………	40
ラヂオ体操……………	42
野菜を作れ……………	44
上野水族館の魚たち……………	46
松の根から重油とガソリン……………	48
わら文化……………	50
竹槍……………	52
迷宮歴史こぼれ話【3】……………	54
第三章…参考文献……………	55
描き下ろしコラム2……………	56
第四章	
軍事歴史雑記帖……………	57
足にはワラジ1……………	58
足にはワラジ2……………	60
ガスマスクのレンズは曇る……………	62
新発明・有刺鉄線……………	64
ベルリン警察……………	66
ツェッペリンと日本とカレー……………	68
哨舎……………	70
悲しき象戦車……………	72
迷宮歴史こぼれ話【4】……………	74
第四章…参考文献……………	74
対談	
加藤陽子×モリナガ・ヨウ……………	75
あとがき……………	79

第一章

決戦兵器の理想と現実

風船爆弾 1

風船爆弾 2

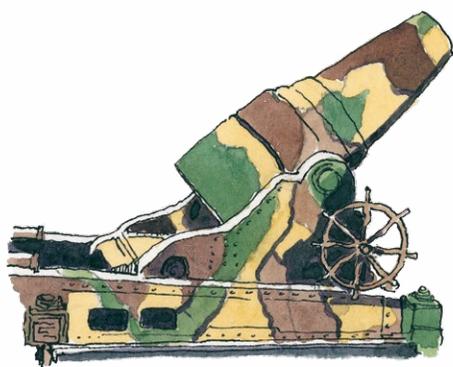
一宮砲台 1

一宮砲台 2

掩体 1

掩体 2

照空船





迷宮歴史倶楽部

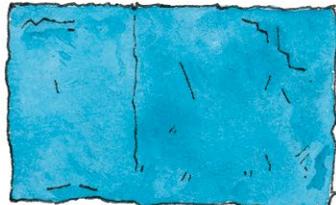
第2回秘密兵器③号のつぎ

川崎にある
登戸研究所
料館に行ってみよう。



(明治大学生田キャンパス内)

風船爆弾和紙



大きめの封筒らしい

登戸研究所
では風船爆弾の
開発を行っていたので
ある。

あ、和紙が展示
ナレていよ。

透明感のある
ブルーであった。
（色）は青色で
みかたのだ。

ジワ
ジワ
ジワ

「こんな風な
凶悪な塗装
ナレていたら、
まだ③号のイメ
ージは壊れてた
かもこれはいま
でも
ブルムが兵器とは
思えん。」



何とも
いえなほど
きれいだった

うっとり
として眺めた
朝の太陽や
夕日に輝いて
色が変化
する。

下から
見てもよく
わからな
かったか
数千メートル

ナレ、今回のX-1は
風船爆弾の
基地跡を見て
みよっ、なのだ。

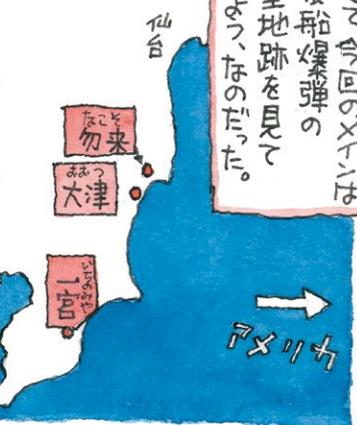
※秘密兵器
だから制式名称が
なく、ただ③号と
呼ばれた。



ヒミツヘイキ
デキコク
カウフク

とはい謀略や秘密兵器
専門の登戸研究所は、た分
凶々しいのだが。

北海道東岸が
いちばん米国に
近いのだが、資材
の輸送など国内
的には不便で、
しかもソ連に飛
んでいても困るから
茨城東岸あたりになった。



静岡からだ
とあるが、ないなあ

東京や千葉は
落ちちやう...

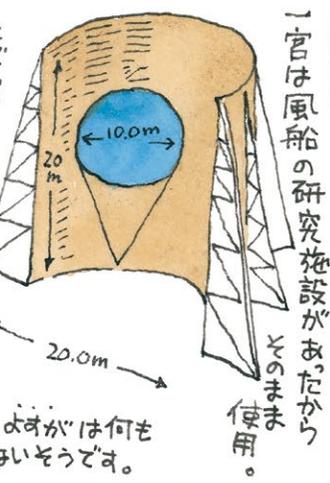


大津基地跡。
戦後木の写真から
作画



大津と勿来は
風除け地形で、
大津はバラスト
用砂も
採れる。

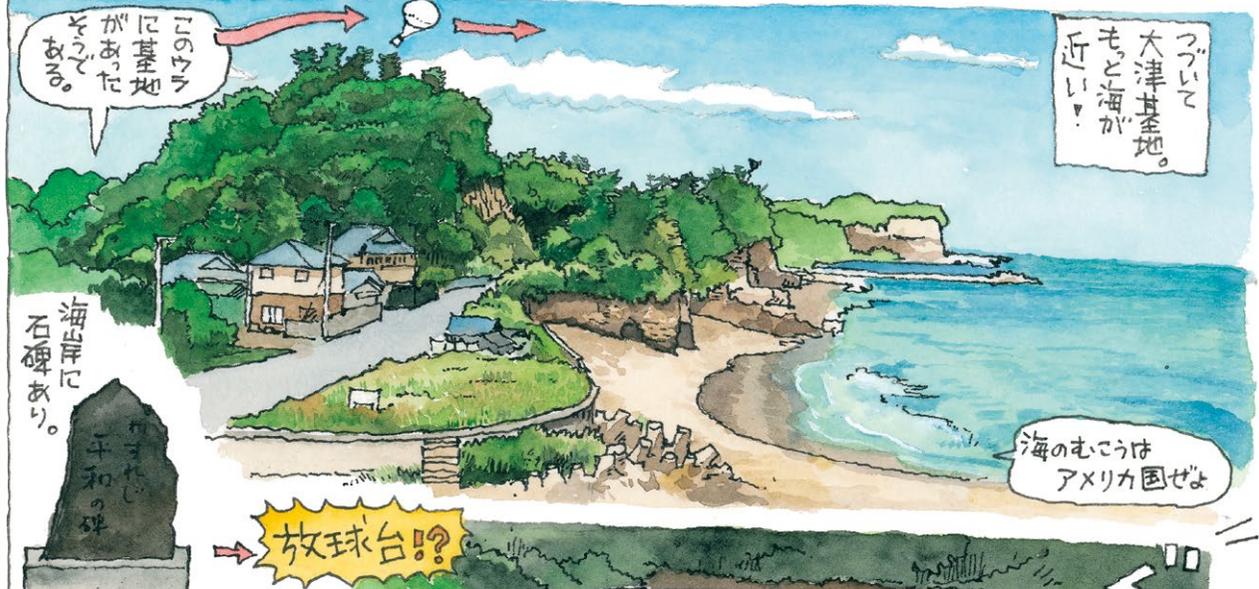
ただ吹き、
さらしだから風除けが
必要とされた(防風壁)。

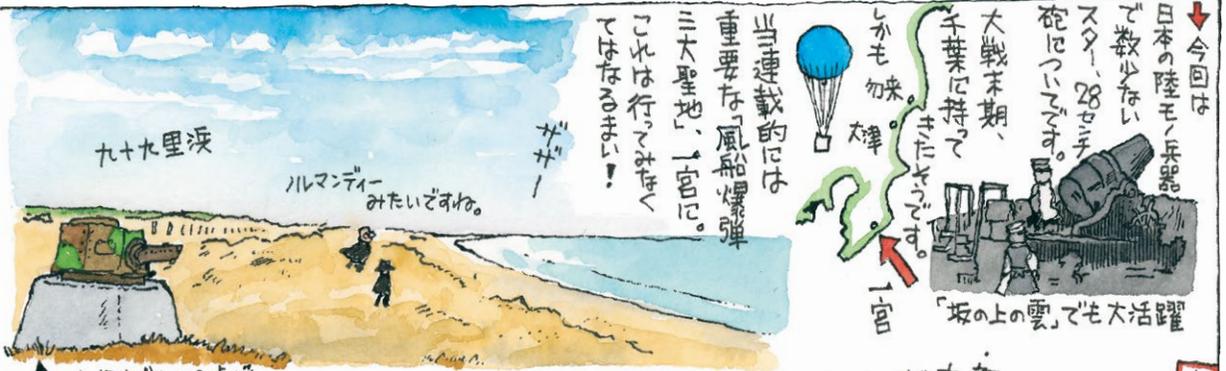


木造。
現在はよすがは何も
残ってないそうです。

一宮は風船の研究施設があったから
そのまま
使用。

基地にされた人は田畑と水たまり
エライ目にあつたそうである。





史話 迷宮これぼれ【1】

風船爆弾1

記念すべき連載第一回目で掲載は『歴史群像』2010年8月号。

「超兵器なのにぜんぜん工業製品ぽくないのが面白いです。絵にするのに写真をよく見ると、つるんとしてるんだけど四角い紙をいくつも貼っている感じがわかります」(毛)

著者は風船爆弾について2006年に飛行機模型雑誌『スケールアヴィエーション』(大日本絵画)11月号誌上で一度、取り組んでおり、本作ではさらに実地検証などが加わり、内容に厚みが加わった。ちなみにこの回以降にも登場する吉祥寺怪人は、プラモデル専門誌などで著者とのコンビが長い編集者(本項1〜4の構成・執筆担当)。

風船爆弾2

「戦後の大津海岸の写真で、9頁と同じアングルのもがありました。3・11の津波ですっかり変わってしまいました」(毛)

連載二回目の執筆前に著者がかつての放球基地跡を訪ね、福島、茨城両県に赴いたのは東日本大震災(2011年)の前年7月であった。ちなみにガイド役は茨城在住のモリナガファン、石川千雅子さんで、本書の準レギュラーのような存在となった。

一宮砲台1

「松の葉が落ちていて赤い、靴が泥だらけに……あの陣地跡はそういつたところが印象深かったですね」(毛)

一宮に展開していた重砲兵第十四連隊は、もともと朝鮮半島にいた羅津要塞重砲兵連隊が改編された部隊で、昭和20年2月に第五十二軍砲兵隊に所属、九十九里浜に展開した。連隊本部は旭町の国民学校に置かれ、第一中隊は銚子、第二中隊は飯岡と塙、第三中隊は八日市場、第四中隊は東金、第五中隊は一宮、第六中隊は大東岬にそれぞれ配備された。連隊の保有火砲は28榴榴

弾砲以外に、三八式野砲、三八式10榴加農砲、九二式10加、九六式15加、九六式15榴、30榴(長・短)など。

一宮砲台2

「砲の揚陸は映画やドラマなどで無視している部分ですよ。佐山さんに聞きに行ったら、今回の題材にズバリの資料が出てきて驚きました」(毛)

日本の火砲の専門家、佐山二郎さんが見せてくださったのは『七年式三十榴長榴弾砲砲床構築ノ順序方法』という手描きの帳面だった。

掩体1

「当時、土木学会の取材で一流のコンクリをいっばい見てきた流れだったので、すさまじい状態なのがわかりました。シャブコンという言い方も土木の先生に教わりました」(毛)

この回でお話をうかがった上野勝也さんは昭和2年、福島県生まれ。師範学校2年生の昭和19年6〜8月、下館飛行場で掩体作りを体験された。戦後は東京・調布に居住、苗圃とされた調布飛行場の一角の森に埋もれた掩体の存在を確認され、近隣の府中・白系台掩体壕とともに保存へのきっかけと

なった(2017年に逝去)。都立武蔵野の森公園内の掩体の見学は自由だが、2号内部の見学はできない。取材にあたり特別にご許可をいただいた。

掩体2

掩体の二回目の取材は2010年の11月であった。

「(翌年の)震災でよく壊れなかったですね……これからどうなるんでしょう。要塞じゃないのでこんなものだったのかもしれないが、壊せないけれど耐震補強したら当時の切迫感がなくなってしまう」(毛)

照空船

今回の主題は照空船だが、調べるうちに補助船舶である徴用機帆船の運命もじつに悲惨であることがわかった。

「フトンを積んでいって、敷いて寝たんでしょか? じつはわからないことばかりですね」(毛)

照空船は太平洋戦争後半、川崎に展開中の高射砲第百十三連隊と、月島に展開中の第百十四連隊が保有しており、『高射戦史』の編制表では百十三連隊に2隻(江戸見)、百十四連隊に4隻(六号)が配備されていた。



[掩体]

右は茂原市の遺跡とされた海軍の掩体で、地主さんの許可を得て取材。「登ったことは、単行本にするため写真を見返すまでまったく忘れていました」(モ)。左は米子と大分にある掩体で、どちらも海軍仕様。それぞれに顔があるのがよくわかる(撮影:吉祥寺)



[一宮砲台]

『歴史群像 太平洋戦史シリーズVol.60 本土決戦』(学研)などをヒントになんとか場所を特定。九十九里海岸のただっ広さと裏腹の静かな山中に、はっきりと28榴の巣穴が遺っていた。1/35の模型の台座をあてはめて当時を思う(撮影:モリナガ)



[風船爆弾]

茨城県の大津基地近くの海岸沿いに設置された、風船爆弾放流地跡の碑。台座の銘板にははっきり「青い気球よ」と記されていた(撮影:モリナガ)

第一章：参考文献

■風船爆弾 1、2

『風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録』(吉野興一、朝日新聞社、2000年)、『私たちの風船爆弾』(林えいだい、亜紀書房、1985年)、『写真記録 風船爆弾 乙女たちの青春』(林えいだい、あらかぎ書店、1985年)、ほか。
協力:石川千雅子(以下敬称略)

■一宮砲台 1、2

『歴史群像 太平洋戦史シリーズ Vol.60 本土決戦 陸海軍、徹底抗戦への準備と日本敗戦。の真実』(学研、2007年)、『戦史叢書 51巻』(朝雲新聞社刊)、『九十九里浜の語部』(長者一九会刊)、『日本陸軍の火砲 機関砲 要塞砲 銃』(佐山二郎、光人社NF文庫、2012年)、『二十八榴榴弾砲解説書』(ビットロード)、『一宮町史』(一宮町役場)、ほか。
協力:佐山二郎、株式会社ビットロード、吉野泰貴

■掩体 1、2

協力:調布飛行場の掩体壕を保存する会(上野勝也)、野川公園サービセンター、吉野泰貴

■照空船

『歴史群像 太平洋戦史シリーズ Vol.60 本土決戦』(学研、2007年)、『戦史叢書 19 本土防空作戦』、『高射戦史』、『高射砲兵戦史』、『黎明 高射砲第一百四聯隊東部1904部隊・(市川)』、『昭和17年陸軍密大日記』、『工兵入門 技術兵科徹底研究』(佐山二郎、光人社NF文庫、2001年)、『戦う日本漁船 戦時下の小型船舶の活躍』(大内建二、光人社NF文庫、2011年)、『常民の戦争と海【聞書】 徴用された小型木造船』(中村隆一郎、東方出版、1993)、『昭和戦争文学全集 第9 武器なき戦い』【ああ機帆船団】(集英社、1965年)、『陸軍船舶戦争』(松原茂生、遠藤 昭、戦誌刊行会、1996年)、ほか。



9784499234115

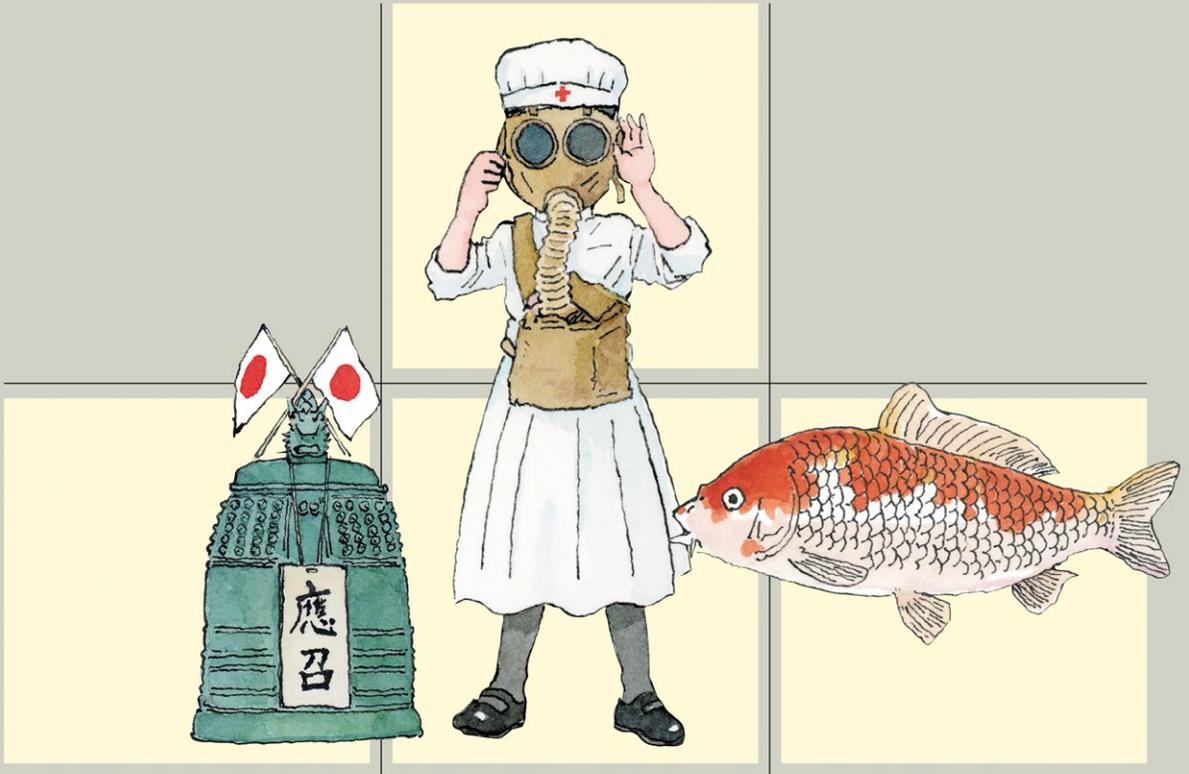
ISBN978-4-499-23411-5

C0076 ¥3600E

定価 (本体 3,600 円+税)



1920076036002



迷宮歴史俱樂部

戦時下日本の事物画報

[新装版]